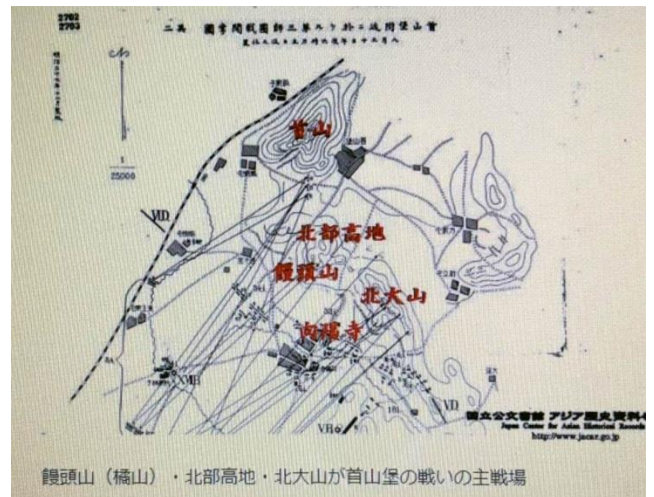


「遼陽」という街 (その1) 寺西俊英

皆さんは、「遼陽市」という都市を聞かれると何を思い浮かべますか？たとえば「遼寧省」「高鉄の駅の一つ」「紅樓夢（曹雪芹）」「白塔」「ヌルハチ(努爾哈赤)」「日露戦争」「広佑寺」「太子河」「東京城」等～このうち3つ以上思い浮かぶ方はかなりの中国通だと思います。かく言う私もこの街は2007年の大連赴任まで知りませんでした。では、遼陽市は遼寧省の一都市ですが、大きさの順で行けば何番目くらいの都市でしょうか？省都は、瀋陽で人口も街の規模も一番大きな都市です。車のナンバーはアルファベットの最初の文字のAです。「遼 A〇〇〇〇」（遼は遼寧省のこと）といった具合です。大連市はどうでしょう。瀋陽の次に大きく、Bとなっています。では遼陽市は遼寧省では何番目の都市でしょう？意外なことにKなのです。そう、11番目の都市なのです。ちなみに人口は2018年で約180万人です。これでKですが、日本では中規模の政令指定都市に相当しますね。

遼陽市は瀋陽と大連の間に位置し、大連とハルピンを結ぶ高速鉄道の停車駅にもなっています。現在はさほど目立たない街となっていますが、歴史を遡ると大連や瀋陽より歴史は長く偉人も多数輩出しており、ベスト5に入ってもおかしくない是非皆さんに知って頂きたい都市です。これから数回に亘って「遼陽市」にスポットライトをあて連載して行きたいと思います。

今でこそ大連市は日本人の知るところとなり、観光客が大勢行くところとなりました。しかし100数十年前は名も無き農漁村で殆ど歴史に登場することはありませんでした。ご承知の通り1904～05年に日露戦争が勃発しました。遼東半島が注目を浴びたのはその10年前に起こった日清戦争で日本が勝利した際に、ロシア、フランス、ドイツによる三国干渉で折角手に入れた遼東半島を放棄せざるを得ず、中国に返還した時からと言えます。ロ



遼陽の会戦の主戦場・首山堡

(国立公文書館・アジア歴史資料センターより)

シアは放棄させた代償として東清鉄道の敷設権を獲得し、さらに旅順・大連を租借地としました。そして日露戦争へと繋がっていくわけですが日露戦争と言えば、多くの日本人は「旅順」「203高地」「水師営」等が思い浮かぶでしょうが、私はもう一つ「遼陽の会戦」をあげたいと思います。

遼陽の会戦は、司馬遼太郎の「坂の上の雲」に詳しく書かれていますが、概要をここに簡記すると以下の通りであります。——「遼陽」の項の書き出しは、〈遼陽は南満州にあっては、奉天（瀋陽）に次ぐ大都会である〉と書かれています。つまり当時は大きな街だったのです。ロシア軍は、〈遼陽はその北の奉天以上に戦略価値がある〉と見ていたと書かれています。つまり四方八方から道路がこの地に集中しており、南満州の中核として位置付けたのでしょう。もともとこの街は四角形で、周囲は城壁が巡り八つの城門を構え、14世紀末頃には大改築されていました。ロシア軍は勝手に租借地のように取り扱い、場外の西郊に遼陽駅を作り、周辺に近代設備を集中し5年かけてロシア人街を形成したのです。総司令官のクロパトキンはこの地に大軍を終結して日本軍を一気に殲滅する作戦を作り上げました。同会戦は1904年8月24

日～9月4日の12日間の戦闘で、両軍の主力が初めて激突した戦いです。クロパトキン率いるロシア軍は23万人の兵で防御網を構築しました。それに対し大山巖率いる日本軍は14万人で対峙したのです。12日間の中で一番の激戦は、遼陽駅の南西に当たる「首山堡」をめぐる攻防でした。首山は200m余りの山ですがそれから北大山に連なる丘陵地が主戦場となりました。日本の騎兵の生みの親ともいわれる秋山好古が縦横無尽に活躍したのはこの戦いです。ロシア軍は日本軍をはるかに凌駕する兵器や物資を持ち堅固な防御陣地を構築しながらも敗色濃くなり、奉天に退却して行っただけです。この時日本軍は追撃するチャンスでしたが余力は残っていませんでした。この戦いの死者は両軍で4万人を上回ると言われています。有名な203高地の攻防はこの戦いの後となります。遼陽出身の友人に聞きますと、「今から115年前に行われた〈遼陽の会戦〉を知っている地元の方は残念ながら殆どいないようです。激戦地の一角の「首山」は何度も友人と山登りをしたことがありますが、戦争の傷跡など見かけません」とのことでした。中国のこの地方の皆さんからしますと、自分たちの領土に勝手に進出してきた国同士が戦争したのですから迷惑千万な話ですね。

さて遼陽はいつ頃から歴史に名を残し始めたのでしょうか。実はこの中国東北部は古代からいろいろな民族の興亡が目まぐるしくあったところです。ここで歴史を遡ってみましょう。遼陽は、かつては「襄平」と称し遼東地方の中心地で、歴史を調べると戦国時代（BC475年～BC221年）まで遡ることができます。つまり今から約2400年前の記録が残っているのです。あの孔子が生きていた時代です。戦国時代には、燕（BC11世紀頃～BC222年）という国の遼東郡の中心地でした。燕は、春秋戦国時代の春秋十二列国の一つで、戦国七雄の一つとされていました。首都は薊に置かれていました。今の北京です。ご承知の通り、この燕はやはり戦国の七雄の一つであった秦により滅ぼされ、

秦は初めて中国を統一しました。その秦も漢に滅ぼされます。漢代（BC206年～AD220年）には玄菟郡に属しました。404年に高句麗が襄平を占領し遼東府と改名。さらに唐（618年～907年）が高句麗を滅ぼしてこの地方を治める唐の安東都護府は、その所在地を平壤から襄平に移しています。ついで遼（契丹人の征服王朝＝916年～1125年）の時代に襄平から遼陽に改名され、遼の副都「東京遼陽府」となりました。その後女真族の金（1115年～1234年）に滅ぼされましたが、金の第5代皇帝の世宗は、次号で紹介する遼陽の象徴である「白塔」を建立しています。その後、元（蒙古族）、明（漢族）、清（女真族、後金）の各時代とも遼陽はこの地方の中心都市としてあり続けたのです。後金（後の清）の最初の皇帝であるヌルハチが初めて遼陽を都としました。ただその期間はわずか3年で、奉天に都を移しました。遼陽の城壁が長いので守りにくいのが原因のようです。世が世であれば遼陽は遼寧省の省都として君臨していたかもしれませぬ。

本号の最後に、遼陽市の地理的な状況に触れておきます。面積は4744平方キロもあり、山梨県の面積（4465平方キロ）とほぼ同じです。地形は平野45%、丘陵20%、山地35%となっています。市の東南部は山々が続き、「湯河風景区」などの観光地がいくつもあります。その地域を除くと、平野や丘陵が広がり大きな山はありません。街の中を多少折れ曲がりながらも東西に「太子河」という河川がゆったり流れています。とても数十年前には何度も洪水があった川のように見えません。南は「鞍山市」という街に隣接しています。昔から鉄が取れることで知られ、近代に到って製鉄の街として有名になり「鋼都」と呼ばれています。遼陽はそこへの人や物資の供給基地の役目を果たすようになったようです。ちなみに鞍山市のナンバープレートは、大連に次ぐ「C」となっています。（つづく）